

# 第一章「興津彌五右衛門の遺書」における理想的な武士像

## 第一節 はじめに

「興津彌五右衛門の遺書」は森鷗外の最初の歴史小説で、1912年10月に『中央公論』第27年第10号に発表された。その後、「興津彌五右衛門の遺書」は改稿を経て、1913年6月鷗外の第一歴史小説集『意地』に収められた。改稿の問題については、尾形侑は「興津彌五右衛門の遺書」の依拠史料を考察し、次のように述べている。

その一つは、主命の前に身命を擲つという献身の行為がいかにして可能であったかということ、他の一つは、主従関係の美しい結ぶつきの極致を示すものともいうべき殉死という行為が、近世封建社会において事実いかなるものであったかということである<sup>1</sup>。

このように、尾形侑は「興津彌五右衛門の遺書」の依拠史料を考察した上で、「没我の世界と心理を調和的に」描かれた武士像が存在するのか、また、このような殉死形式は、封建社会に存在するのか、という二つの疑問点を指摘したのである。そして、尾形侑は「興津の献身行為をしかあらしめた歴史的与件の究明という形で、再稿本『興津彌五右衛門の遺書』へと発展してゆく」<sup>2</sup>と鷗外の改稿することを究明し「天皇の絶対権力は、いわば封建領主の絶対権力の形を変えた延長であり、忠君愛国の精神は、近世封建社会において完成された武士の倫理を基礎としてつちかわれたものにほかならないからである」<sup>3</sup>と殉死行為の真実性を解明したのである。つまり、「興津彌五右衛門の遺書」定本においては、彌五右衛門の献身行為を合理化し、彌五右衛門のような忠君愛国の精神も存在しているのである。本論文のテキストにしたのは、定稿となった『意地』に収録された本文である。そして、本章の主旨としては、「興津彌五右衛門の遺書」における武士像を究明するので、初稿文と定本の差異性の比較や対照することに触れず、直ちに本論文の中心に入ることにする。

<sup>1</sup>尾形侑（1962）「歴史小説の史料と方法―「興津彌五右衛門の遺書」「阿部一族」―」『東京教育大学文学部紀要：国文学漢文学叢』第7輯 東京教育大学文学部 P.47

<sup>2</sup>尾形侑（1962）「歴史小説の史料と方法―「興津彌五右衛門の遺書」「阿部一族」―」『東京教育大学文学部紀要：国文学漢文学叢』第7輯 東京教育大学文学部 P.47

<sup>3</sup>尾形侑（1962）「歴史小説の史料と方法―「興津彌五右衛門の遺書」「阿部一族」―」『東京教育大学文学部紀要：国文学漢文学叢』第7輯 東京教育大学文学部 P.47

一方、「興津彌五右衛門の遺書」の内容について、小泉浩一郎は次のように指摘した。

鷗外の貴族主義は、政治的にして経済的、ひいては社会的なる存在としての人間現実への目によって、不断に解体されつつあるとも云えるので、この観点に立てば、歴史小説の第一作「興津彌五右衛門の遺書」の一元的な主命絶対主義、反功利主義、ひいては規範主義の主張、それらの前提としての君臣の一体感が、(後略)<sup>4</sup>。

このように、「興津彌五右衛門の遺書」には、「主命絶対主義」、「反功利主義」、「規範主義の主張」、「君臣の一体感」という四つの特色があると小泉浩一郎が指摘した。要するに、「興津彌五右衛門の遺書」の君臣関係には一体感があり、臣下や主君は共に秩序の絶対的規範性を持つ武士だと見られる。それに、生松敬三は主人公彌五右衛門という武士像について、「あくまでも主命を大切として些かも迷うことなく殉死まで至る興津彌五右衛門という一人の武士の一つの絶対的な秩序への帰依、自己滅却の姿を描いたこの小説は、殉死への賛美であり、彌五右衛門的生き方の是認であるかのように見える」<sup>5</sup>と説明したのである。つまり、彌五右衛門は主命を大切にしている武士であり、封建社会に定められた秩序に合致し、自我犠牲の者だと生松は論じた。さらに、神澤秀太郎は「これが忠誠と献身に生きた人間の、打算と我執のみに生きる現代人にはおそらく絶対に理解しがたい、究極の人間の美の姿である」<sup>6</sup>と彌五右衛門を美しく究極的な武士として高い評価をつけている。つまり、君臣の一体感がある武士像にせよ、自我犠牲の武士像にせよ、美しく究極的な武士像にせよ、すべてが「興津彌五右衛門の遺書」に見られる主人公彌五右衛門の武士像である。だが、なぜ主人公彌五右衛門と細川家の主君達は、一体感があるのか。なぜ彌五右衛門は主命を大切にするのか、これらのことに興味深く感じているので、主人公興津彌五右衛門のと細川家の主君達を取り上げ、興津彌五右衛門と主君の君臣関係における支配関係を考察していきたいと思う。この考察を通して、彌五右衛門が細川家に対する態度を明らかにし、三齋公ないしほかの細川家の主君が彌五右衛門に取る姿勢をも究明する。さらに、調和的な主君関係となる要素を究明

<sup>4</sup>小泉浩一郎(1995)「森鷗外論」『卒業論文のための作家論と作品論』至文堂 P.23

<sup>5</sup>生松敬三(1958)『森鷗外』東京大学出版会 P.198

<sup>6</sup>神澤秀太郎(2002)『鷗外 歴史小説 よこ道うら道おもて道』文芸社 P.292

する一方、「興津彌五右衛門の遺書」における武士像を明らかにする。



## 第二節 主命至上の興津彌五右衛門

彌五右衛門が遺書の終末部に、遺志を次のように書き残した。

此遺書は倅才右衛門宛にいたし置候へば、子々孫々相傳、某が志を継ぎ、御當家に奉對、忠誠を可擢候。(P.580)

上述した文を見れば、彌五右衛門は、子々孫々が自分のように、細川家に忠誠を誓い、奉公してもらいたいのである。そして、彌五右衛門の遺志によると、彌五右衛門が細川家に忠誠心を持つ家臣だと推測される。封建社会において、臣下は主君に忠誠するのが当たり前のことである。なぜ、彌五右衛門は遺書の形を通して子々孫々に遺言を言い付けたか。彌五右衛門は別の意図があるのであろうか。この問題を究明する前に、まず、彌五右衛門の細川家に対する態度を考察する。

### 2.1 興津家と細川家の関係

彌五右衛門は遺書の冒頭文には、興津家と細川家の関係を書いた。彌五右衛門の父景一は天正九年から慶長元年の初めまでに、赤松殿で奉仕し、千三百石の俸禄を貰っていた家臣であった。景一は京都赤松殿に奉公しているときに、烏丸光廣卿と知り合った。赤松殿が田邊城を攻めるとき、光廣卿は仲間として景一と田邊城で立て籠った三齋公を手伝った。この戦役が終わった後、細川家は勝利し、赤松家は滅ぼされてしまったため、景一は外戚の従弟たる森三右衛門の計らいで、豊前國の細川家に召抱えられることになった。先代主君の忠利が肥後国に入国した時、景一も連れて行かれたのである。その後、彌五右衛門の兄九郎兵衛一友も三齋公の世話になったのである。

このように、彌五右衛門は遺書の冒頭文の父と兄がいつも細川家の世話になっているという叙述から見ると、彌五右衛門は細川家に感謝の気持ちを持っているのである。それに、彌五右衛門は殉死を決意する前に、さらに「父兄悉く出格の御引き立てを蒙り」(P.577) ことも再び叙述した。従って、彌五右衛門は、父と兄のことを細川家に重視してくれたことに、尊敬の念や感謝の気持ちが生じたのである。

## 2.2 彌五右衛門と三齋公の関係

彌五右衛門の遺書には、とりわけ長崎の香木事件を提起した。このことから見れば、長崎の香木事件は彌五右衛門の人生において重要な意味があるものと思われる。従って、彌五右衛門が細川家に対する気持ちを一層理解するために、長崎の香木事件を含めて考察することが必要である。これから、長崎の香木事件の経緯を考察する。

### 2.2.1 長崎の香木事件

三齋公の命令により、茶事用の珍しい品物を求めるために、彌五右衛門は相役横田清兵衛と二人で、長崎へ向かった。今回、長崎の渡来品の中に、伽羅の香木がある。その中に本木は一番珍しいものである。珍しい物を手に入れると言う主命に従い彌五右衛門は伽羅の本木を買いたい、伊達家の武士も同じ品物を手に入れたいのである。両方競い合う為、本木の値段も急に跳ね上がったのである。そして、彌五右衛門は横田との争論もここから始まったのである。そこで、二人の論争の内容をしてみる。

其時横田申候は、假令主命なりとも、香木は無用の翫物に有之、過分の大金を擲候事は不可然、所詮本木を伊達家に譲り、末木を買求めたき由申候。某申候は、某は左様には存じ不申、主君の申附けられ候は、珍らしき品を買ひ求め参れとの事なるに、此度渡來候品の中にて、第一の珍物は彼伽羅に有之、其木に本末あれば、本木の方が尤物中の尤物たること勿論なり、それを手に入れてこそ主命を果たすに當たるべけれ、伊達家の伊達を増長為致、本木を譲り候ては、細川家の流れを瀆す事と相成可申と申候。 (P.575)

上の例文を見ると、彌五右衛門は伽羅の本木を買いたい理由が二つあることがわかる。一つは、本木は「尤物中の尤物たること」(P.575)である。もう一つのは、細川家の武士として、伊達家に本木を譲るなら、主家の流れを傷つける恐れがあるのは心配なのである。要するに、彌五右衛門は主命を果たしたいだけでなく、細川家の名誉をも守りたいのである。しかし、彌五右衛門は自分の気持ちを横田に伝えた際に、横田が「高が四疊半の爐にくべらるゝ木の切れならずや、それに大金を棄てんこと存じも不寄、假令主君が強いて本木を手に入れたく思召されんとも、それを遂げさせ申す事、阿諛便佞の所為なるべしと」(P.575) 経済

的な理由で、彌五右衛門に反対したのである。それに対して、彌五右衛門は次のように言った。

それは奈何にも賢人らしき申條なり、乍去某は只主命と申物が大切なるにて、主君あの城を落せと被仰候はゞ、鐵壁なりとも乗り取り可申、あの首を取れと被仰候はゞ、鬼神なりとも討ち果たし可申と同じく、珍らしき品を求め參れと被仰候へば、此上なき名物を求めん所存なり、主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入り候批判がましき儀は無用なりと申候。(P.576)

このように、彌五右衛門は横田の見方や意見に納得できないようである。そして、彌五右衛門は、「主命」(P.576)を果たすために、再び本木を買いたいと横田を説得しようとし続けたのである。しかしながら、横田は依然として、経済的な面から、「これが武具杯ならば、大金に代ふとも惜しからじ、香木に不相應なる價を出さんとせらるゝは若輩の心得違なりと」(P.576)彌五右衛門に説明したのである。だが、彌五右衛門は「主命」(P.576)を果たすという主張を堅持しつづけたので、どうしても横田の話に納得がいかないのである。それで、彌五右衛門は横田の嘲笑が我慢しながら、細川家の茶道に関する逸話や茶道への関心を横田に次のように述べた。

御當家に於かせられては、代々武道の御心掛深くおはしまし、旁歌道茶事迄も堪能に為渡らるが、天下に比類なき所ならずや、茶儀は無用の虚禮なりと申さば、國家の大禮、先祖の祭祀も總て虚禮なるべし、我等此度仰を受けたるは茶事に御用に立つべき珍らしき品を求むる外他事なし、これが主命なれば、身命に懸けても果たさでは相成らず、貴殿が香木に大金を出す事不相應なりと被思候は、其道の御心得なき故、一徹に左様思はるるならんと申候。(P.576)

このように、細川家の伝統文化を詳しく知っている彌五右衛門は横田に、細川家に召抱えられた武士として、主命に従って珍しき品を買い求めるべきことだと説得しようとしたのである。従って、彌五右衛門は、細川家が武道を重視するだけでなく、歌道、茶事などの芸道も大事にする武家ということを理解している家臣だと見られる。そして、主家の名誉を守りたい武士だと思われる。だが、横田は彌五右衛門の説明に対

して、納得できない様子で、「いかにも某は茶事の心得なし、一徹なる武邊者なり、諸藝に堪能なるお手前の表藝が見たしと」(P.576)言うや否や、彌五右衛門に挑発した。挑発された彌五右衛門は「刀を取り抜き合わせ、只一打に横田を討ち果たし」(P.576)たのである。

以上は彌五右衛門と横田の論争をめぐって、考察した内容である。この考察を通して、彌五右衛門の性格の特徴が次のように見られる。第一、伽羅の本木を買うことから見れば、物事の達成を第一に考え、経済面を無視する性格がある。第二、彌五右衛門はただ挑発されただけで、相手の命までも取るという行為から見れば、気の強い武士だと見られる。第三、彌五右衛門は違った意見を受け入れる寛容な心がないのである。第四、主家の名誉を守るため、また主命を果たすためなら手段を選ばない人物だという印象を与える。つまり、彌五右衛門と横田の論争から、彌五右衛門は意地を張っている武士だといえる。それに対して、横田は現実面から考える武士だと見られる。

### 2.3 殺人事件の処置方法

彌五右衛門は伽羅の本木を持ち帰り、三齋公に献上すると共に、横田を殺したことを次のように報告した。

某は香木を三齋公に為參、扱御願申候は、主命大切と心得候為とは申ながら、御役に立つべき侍一人討ち果たし候段、恐れ入り候へば、切腹被仰附度と申候。(P.577)

このように、彌五右衛門は「主命大切」(P.577)ということ的前提に、横田を殺したことを三齋公に報告しただけではなく、殉死の要請をも提出したのである。このような行為から見れば、彌五右衛門は殺人の罪を犯した責任を意識し、負うつもりがあるのである。彌五右衛門の殉死要請について、神澤秀太郎は次のように指摘した。

主命完遂と引き替えに「御役に立つべき侍一人討ち果たし」たことが、興津の心中に深くわだかまった。「不忠」の念である。忠義を尽くしたことが皮肉にも不忠の行為となってしまった。当時の武士なら、武士の武士たる所以が、主君にたいし忠誠を尽くすことにあることに、懷疑の念をいだいたものはいなかったはずだ。したが

って自己の行為が不忠であれば、自己の生命を持ってその罪を償うしか、武士に与えられた行動の指標はない。切腹である<sup>7</sup>。

このように、彌五右衛門は横田を殺したのが主君に不忠な行為であることを意識した上で、個人の生命を持って罪を償いたがるのである。神澤秀太郎の論述には賛成する。確かに、彌五右衛門と横田の争論内容によると、彌五右衛門は主命大切の考え方を持っている武士だと見られる。従って、主命を大切にしている彌五右衛門は、殉死要請を申し出、「不忠」という罪を消滅しようとしたようにみえる。

三齋公は彌五右衛門が横田を殺したことを知ってから、以下のように反応した。

三齋公被聞召、某に被仰候は其方が申し條一々尤至極せり、假令香木は貴からずとも、此方が求め參れと申し附けたる珍品に相違なければ大切と心得候事當然なり、總て功利の念を以て物を見候はば、世の中に尊き物は無くなるべし、 (P.577)

上の例文のように、三齋公は彌五右衛門の言い分を納得し、「此方が求め參れと申し附けたる珍品に相違なければ大切と心得候事當然なり」(P.577) という観念を彌五右衛門に説明したのである。即ち、主君としての三齋公は、臣下としての彌五右衛門が主命を果すために、珍しき品と相応しい伽羅の本木を手に入れるという所作は、武士の本分だと考えている。しかも、三齋公は彌五右衛門の所作を認めるだけでなく、彌五右衛門が買った伽羅の本木のことが気に入ったのである。要するに、彌五右衛門は物事に対して、三齋公との共同な価値観を持っているから、免罪されたといえる。

その後、彌五右衛門は免罪された以外に、横田を殺したことも三齋公に後処理をしてもらい、三齋公から御名忠興の興という字をもらい、沖津を興津と改められたのである。そして、この事件から二年目、寛永三年に天皇が細川家でこの伽羅の本木を見た際に、「たぐひありと誰かはいはむ末勻ふ秋より後のしら菊の花」と (P.577) という銘をつけて、この珍しい香木を賛美した。このことを知った彌五右衛門は、自分が買った香木が、「畏くも至尊の御賞美を被り、御當家の譽と相成候事、不存寄

<sup>7</sup>神澤秀太郎 (2002) 『鷗外歴史小説 よこ道うら道おもて道』文芸社 P.290

儀と存じ、落涙」(P.577)した。このような反応を見れば、彌五右衛門は感動のあまり、細川家の武士としてうれしくてたまらない気持ちがするのである。そして、彌五右衛門はこの香木のおかげで、特例として本来の職位を賜り、出世した。

## 2.4 殉死を決意したきっかけ

横田を殺しても、殉死も許されなかった彌五右衛門はどのようなことをきっかけとして、殉死することを決意したのか。そこで、彌五右衛門が主君の辞世したことに対する描写を考察する。

寛永十八年妙解院殿不存寄御病氣にて、御父上に先立、御卒去被遊、當代肥後守殿光尚公の御代と相成候。同年九月二日には父彌五右衛門景一死去いたし候。次いで正保二年三齋公も御卒去被遊候。是より先き寛永十三年には、同じ香木の本末を分けて珍重被成候仙臺中納言殿さへ、少林城に於いて御薨去被成候。彼末木の香は「世の中の憂きを身に積む柴舟やたかぬ先よりこがれ行くらん」と申す歌の心にて、柴舟と銘し、御珍藏被成由に候。 (P.578)

以上の文によると、細川家の主君である妙解院殿と父と三齋公、そして、伽羅の競争に負けて末木を手に入れた仙臺中納言殿も、彌五右衛門より早く死亡したことがわかった。だが、彌五右衛門はなぜ細川家の主君たちと父のこと以外に、とりわけ仙臺中納言殿を提起して、末木を得た仙臺中納言殿がこの品物を手に入れて、満足な様子で末木を「柴舟」(P.578)と銘し珍藏したことを特筆したのか。それは、仙臺中納言殿のことを通じて、彌五右衛門が長崎で伽羅の本木を争い合った際に、勝利を得たことがいかに価値のある勝利だったのかを自分の功績として誇りたいことであろう。それでは、彌五右衛門は主家に世話になって以来、主家に対する気持ちはどうだったのであろうか。

某熟先考御當家に奉仕候てより以來の事を思ふに、父兄悉く出格の御引き立てを蒙りしは言ふも更なり、某一身に取りては、長崎に於いて相役横田清兵衛を討ち果たし候時、松向寺殿一命を御救助被下、此再造の大恩ある主君御卒去被遊候に、某争でか存命いたさるべきと決心いたし候。 (P.578)

以上の文から、彌五右衛門が主家が父と兄に「出格の御引き立てを蒙り」（P.578）、自分も「一命を御救助被下」（P.578）という愛護を受けて、心から感謝している気持ちが見られる。そして、主家からいつも愛護を受ける関係で、彌五右衛門は主家の愛護に応えるために、殉死することを決意したのである。つまり、彌五右衛門の殉死を決意したのが、主君に恩を報いるためである。殉死を決意した彌五右衛門は直ちに殉死を実行するのではなく、残務を処理してから、松向寺殿の納骨が済んだ後、当代の主君光尚に殉死許可要求を提出した。それでは、光尚の態度はどうであったのだろうか。

さて今年御用相片附候へば、御當代に宿望言上いたし候に、已み難き某が志を御聞き届被遊候。十月二十九日朝御暇乞に参り、御振舞に預かり、御手づから御茶を被下、引出物として九曜の紋赤裏の小袖二襲を賜はり候。退出候後、林外記殿、藤崎作左衛門殿を御使として被遣後々の事心配致間敷旨被仰、御歌を被下、また京都へ参らば、萬事古橋小左衛門と相談して執り行へと懇に被仰候。其外堀田加賀守殿、稲葉能登守殿も御歌を被下候。十一月二日江戸出立の時は、御當代の御使として田中左兵衛殿品川迄被見送候。（P.579）

上の文によれば、彌五右衛門は殉死要請を提出した後、当代の主君光尚は親切で、かつ周囲の同士も好意な態度に対応されたのである。そして、三齋公の恩情に報いるために、殉死を決意した彌五右衛門は、当代の主君忠利の許可をもらい、周囲の人々に祝われ、一步一步殉死の道に向かって進んでいったのである。従って、彌五右衛門は最後に殉死ができたのが、個人の主張の外に、主君と周囲の人々の合意が貰えた上のことである。

## 2.5 殉死すること

主君光尚の殉死許可が貰えた彌五右衛門は、主家に次のような盛大な殉死場面を作ってあげた。

明日切腹候場所は、古橋殿取計にて、船岡山の下に假屋を建て、大徳寺門前より假屋迄十八町の間、藁筵三千八百枚餘を敷き詰め、假屋の内には畳一枚を敷き、上に白布を覆有之候由に候。いかにも晴れがましく候て、心苦しく候え共、是亦主命なれば無是非候。立

會は御當代の御名代谷内蔵之允殿、御家老長岡與八郎殿、同半左衛門殿にて、大徳寺清巖實堂和尚も被臨場候。倅才右衛門も可參候。介錯は兼て乃美市郎兵衛勝嘉殿に頼置候。

某法名は孤峰不白と自選いたし候。身不肖ながら見苦しき最期も致間敷存居候。(P.580)

彌五右衛門の筆触によると、これが主命なので、仕方がないという感じもあるが、人生の最後に立派な殉死を通して、人生の最高な光栄が得られる快い心情も見られる。

ここまで、彌五右衛門の臣下としての人物像を考察した。最初、彌五右衛門は父と兄のことが細川家に重視されてもらったことに、尊敬の念と感謝の気持ちが生じた。そして、長崎の香木事件において、彌五右衛門は主命を果たすために、意見が合わない同僚横田を殺し、珍しい伽羅の本木を手に入れたのである。殺人の罪を犯した彌五右衛門は、「主命大切」(P.577)の奉公態度が主君三齋公に認められたので、免罪されたのである。そして、香木事件以後、彌五右衛門は主君の格別な対応により、主家への忠誠心をさらに持つようになり、最後に主家に盛大な殉死場面を作ってもらい、満足のままで殉死した。このように、彌五右衛門は主君との共同な観念を持っているので、主家の寵愛を得た臣下になったのである。そして、彌五右衛門は主君の格別な対応にしたがって、主家への忠誠心を生じ、主命至上の武士になったのである。つまり、彌五右衛門は主家の寵愛を得た武士であり、主命至上の武士でもある。

### 第三節 論功行賞の三齋公

本節では、前の分析に引き続き、三齋公の立場から、彌五右衛門との君臣関係を考察する。

#### 3.1 三齋公の興津家に対する態度

三齋公の父である泰勝院殿幽齋藤孝公が田邊城に立て籠もるとき、彌五右衛門の父景一に救われた。この事件をきっかけとして、景一は細川家に召抱えられ、三齋公の嫡子忠利が肥後国に入国した時、景一も連れて行かれたのである。その後、彌五右衛門の兄九郎兵衛一友も三齋公に召抱えた。いわば、細川家の主君は、彌五右衛門の父景一が藤孝公を救ったという由緒があって、細川家の主君は恩を報いるために、彌五右衛門の父景一と兄九郎兵衛一友を召抱えたのである。

#### 3.2 三齋公が彌五右衛門に対する態度

彌五右衛門と三齋公との君臣関係の展開は、慶長 17 年彌五右衛門 (19 歳) が三齋公に召し出された頃である。元和 7 年三齋公致仕した時、28 歳に彌五右衛門と名のり、三齋公の御供をし、豊前國興津に参った。寛永元年 5 月彌五右衛門が 31 歳時、相役横田と長崎へ珍しき品を買い求めに行った。しかし、長崎で伽羅の本木を買ううちに、彌五右衛門は横田と意見が合わないため、横田を殺したのである。相役を殺した彌五右衛門は手に入った伽羅の本木を持って帰り、自分の過失を三齋公に報告して、殉死願いを申し出たのである。三齋公の返答は次の通りである。

某に被仰候は其方が申し條一々尤至極せり、假令香木は貴からずとも、此方が求め参れと申し附けたる珍品に相違なければ大切と心得候事當然なり、總て功利の念を以て物を見候はば、世の中に尊き物は無くなるべし、（後略）(P.577)

このように、三齋公は彌五右衛門に例え香木が貴重なものでなくても、主命に従って珍しい品物と相応する伽羅の本木を買ってきたのは当たり前のことなので、彌五右衛門の行為を許したのである。それは、主君としての三齋公は、臣下が主命に服従するのが武士の尽くすべき本分だと考えているからである。そして、三齋公は「總て功利の念を以て物を見候はば、世の中に尊き物は無くなるべし」という物事に対する考えを彌

五右衛門に話した。三齋公の物事に対する考え方から見れば、三齋公は物事の価値が功利の立場から見るのではなく、それなりの価値があるべきと主張している非功利主義な主君である。それに対して、三齋公は彌五右衛門が伽羅の本木という珍しい品物を買ってきたことに対する見方を見てみる。

矧や其方を持ち歸り候伽羅は早速焚き試み候に、希代の名木なれば「聞く度に珍らしければ郭公いつも初音の心地こそすれ」と申す古歌に本づき、銘を初音と附けたり、斯程の品を求め歸り候事天晴なり、(P.577)

以上の文を見ると、三齋公は彌五右衛門が買った伽羅の本木に感動し、銘をつけた。それは、最初に三齋公は珍しい品物を買って求めることを臣下に依頼したが、彌五右衛門が自分の期待以上の物、尤物中の尤物である伽羅の本木を持って帰ったのである。このような珍しい品物を手に入れた三齋公は、彌五右衛門の行為に感動し、彌五右衛門が横田を殺した事件の後処理を引き受けるのである。三齋公が興津家の対応から見れば、三齋公は名望ある君主でありながら、個人の感情に影響され、行動を取るのである。

そして、三齋公はこの殺人事件を円満に解決するために、彌五右衛門と横田家との関係を仲直そうとした。それは、三齋公は「討候横田清兵衛が子孫遺恨を含居ては不相成と被仰候」(P.577)ので、「直ちに清兵衛が嫡子を被召、御前に於て盃を被申付、某は彼者と互に意趣を存ず間敷旨誓言いたし候」(P.577)のである。しかしながら、三齋公は横田家の者に三齋公に対する異心がある者が発覚し、筑前国へ左遷させたのである。三齋公が横田家の者を筑前国へ左遷させたという処置を見れば、三齋公の信頼関係をなくした臣下に対する態度は、命までとらずに、ただ互いの君臣関係をすっぱりと切るのである。つまり、三齋公は、臣下の所為に影響され、論功行賞の主君だといえる。

### 3.3 光尚の彌五右衛門に対する態度

細川家は彌五右衛門が買った香木でどのような名誉をもたらしたのか、以下の文で考察しよう。

此れより二年目、寛永三年九月六日主上二條の御城へ行幸被遊妙解院殿へ彼名香を御所望有之即之を被献、主上叡感有て「たぐひありと誰かはいはむ末勻ふ秋より後のしら菊の花」と申す古歌の心にて、白菊と為名附給由承り候。某が買ひ求め候香木、畏くも至尊の御賞美を被り、御當家の譽と相成候事、不存寄儀と存じ、落涙候事に候。

其後某は御先代妙解院殿よりも出格の御引き立を蒙り、寛永九年御國替の砌には、三齋公の御居城八代に相詰候事と相成、剩へ殿御上京の御供にさへ被召具候。然處寛永十四年島原征伐の事有之候。某をば妙解院殿御弟君中務少輔殿立孝公の御旗下に加へられ御幟を御預被成。(P.577)

天皇は細川家の主君忠利の家に寄って、彌五右衛門が買った香木を見るときに、「白菊」(P.577)という銘をつけたのである。そして、抜擢された彌五右衛門はこの香木のおかげで出世した。彌五右衛門が昇進した直接な理由は、買って来た香木が細川家にさらなる名誉を与えたからである。主君の対応や態度から見れば、主君に役に立ったことをした臣下を賞賛することは当たり前である。ところで、主家に格別な対応を受けた彌五右衛門が殉死要請を提出したときに、当代の主君光尚はどのように対応するのか、以下の文から見てみよう。

さて今年御用相片附候へば、御當代に宿望言上いたし候に、已み難き某が志を御聞き届被遊候。十月二十九日朝御暇乞に参り、御振舞に預かり、御手づから御茶を被下、引出物として九曜の紋赤裏の小袖二襲を賜はり候。

(中略)

明日切腹候場所は、古橋殿取計にて、船岡山の下に假屋を建て、大徳寺門前より假屋迄十八町の間、藁筵三千八百枚餘を敷き詰め、假屋の内には畳一枚を敷き、上に白布を覆有之候由に候。いかにも晴れがましく候て、心苦しく候え共、是亦主命なれば無是非候。立會は御當代の御名代谷内蔵之允殿、御家老長岡與八郎殿、同半左衛門殿にて、大徳寺清巖實堂和尚も被臨場候。倅才右衛門も可參候。介錯は兼て乃美市郎兵衛勝嘉殿に頼置候。(PP.579-580)

このように、当代の主君である光尚は「引出物として九曜の紋赤裏の小袖二襲」(P.579)を彌五右衛門にあげ、盛大な殉死場所を作ったのである。ちなみに、大徳寺から切腹場所まで、3800枚に至る藁筵を敷き詰めることを見れば、この場面の規模は非常に大きく、すばらしい立派な様子が伺える。要するに、光尚は先代の主君の彌五右衛門に対する対応を引き継ぎ、このような盛大な殉死場面を用意したのである。

ここまで細川家の主君像を考察してきた結果により、細川家の主君が彌五右衛門に格別な対応をするのは、彌五右衛門が主命至上という態度に感心したのである。そして、三齋公は彌五右衛門が同僚横田を殺したことを庇いながら、後処理をしたのは、彌五右衛門から珍しい伽羅の本木を献上され、「主命大切」(P.577)という理由を受け取ったのである。要するに、三齋公は彌五右衛門の奉公態度を認めたので、手伝った。一方、三齋公は彌五右衛門の殺人事件の後片付けをしている途中、横田家に異心があるものを見つけ、左遷させたという処置態度から見れば、三齋公は臣下の忠誠心を優先的に考える主君であり、適切な対応で処置し、論功行賞の主君だといえる。



#### 第四節 おわりに

三齋公と彌五右衛門の君臣関係における支配関係を考察した結果、三齋公は臣下の所為に影響され、論功行賞の主君である。彌五右衛門は三齋公の格別な対応に影響され、心から忠誠を誓い、三齋公に奉公する臣下であり、主家の寵愛を得た臣下である。要するに、興津彌五右衛門と三齋公ともに、武士としての本分と物事に対して共通な価値観を持っているから、各々の本分を尽くし、互いの立場を配慮し、満足のできた相互関係を築くことができたのである。そして、このような良い循環になる君臣関係には、契約で築いた利益的な関係を超え、一体感があり、強力な信頼関係が成り立ったのである。つまり、三齋公と彌五右衛門との君臣関係には、このような信頼関係があり、調和の君臣関係もでき、互いに相手の立場を考える武士像が成立している。三齋公と彌五右衛門の支配関係を整理してみれば、図2の通りである。

一方、この作品には、横田という現実的な面(特に経済的面)から物事の価値を判断する武士の造形も見られる。そして、横田家の者に異心がある事から、「興津彌五右衛門の遺書」における武士像は主君に忠誠を誓うする臣下と、主君に異心を抱く臣下もいる。従って、「興津彌五右衛門の遺書」に描かれた感情的な信頼関係が存在する調和の取れた君臣関係ほかに、ただ経済的な部分の契約で築いた君臣関係もある。そして、感情がねじり込んで、信頼関係が存在する調和のとれた君臣関係における武士像は、互いに関心を持つことができるのである。それに反している関係では、主君関係の契約をきり、それぞれの道を歩くことにするのである。

図2 「興津彌五右衛門の遺書」—三齋公と興津彌五衛門

